

今回の研修ではAFPYの考え方を学びました。今までいろいろな研修を受けてきましたがこれほど強い感銘を受けた研修はありませんでした。自分なりの解釈が入っているのどこまで正確に復伝できるか不安はあるのですが、「教員とは何か。」ということをおぼろげに考えてみるきっかけになったので少し長くなりますが報告させていただきます。

今までのやり方や考え方を捨てる勇気を持ちましょう

私（藤田）は教員生活20年をこえ、過去にはそれなりに満足できる指導ができたことがあります。だからいつの間にか「このやりかたでいいのだ。もしこの方法で成長できない生徒がいたら生徒に問題がある。」と考えていました。だからAFPYにかぎらずどんな研修を受けても「まあ、自分のスタイルは変えないけどね」と内心思っていました。変わらないことに意味があると思っていたのです。もうひとつ昔の教育をよく批判されるけれども自分自身が昔の教育を受けて成人しているので、「昔の教育がだめなのなら俺がだめってことか！」という自尊心もあったのです。このことを今回の講師でPAの第一人者である難波克己先生に聞いてみました。

今、全国で学級崩壊で苦しんでいるほとんどの先生が昔のスタイルに固執している先生です。

その理由はいつの時代も生徒は社会の鏡であり、その時代の社会の影響を強く受けている。あなたが子供の時にTVゲームがありましたか？インターネットがありましたか？もしあったら？ ということです。

それで、私の時代の子どもと今の子どもの環境の大きな違いを考えてみました。

	昔の子ども	今の子ども
遊ぶ	自然観察（虫取りなど）	TVゲーム
	集団ゲーム	アニメ鑑賞
	テレビ鑑賞	インターネット
	読書	読書
	お絵かき	ショッピング
暮らし	貧乏	豊か
親子	大人中心	子ども中心
	学歴低い人が多い	学歴高い人が多い
	先生に肯定的	先生に批判的

生命の尊重・人間関係づくり・礼儀など、今現在の学校教育に求められていることを私は、ほとんど教育活動以外の場で学んでいました。ということは今のほとんどの子どもたちは**昔の教育では私と同じ価値観をもてるはずがない**

というあたりまえの事実です。（今更何ってんのとかいわないよーに）

では教育の目的とはいったいなんのでしょうか。不勉強な私は「将来の日本を任せられることができる人間にすればよい。」と漠然と考えていました。しかしもっとも大事なことの一つに

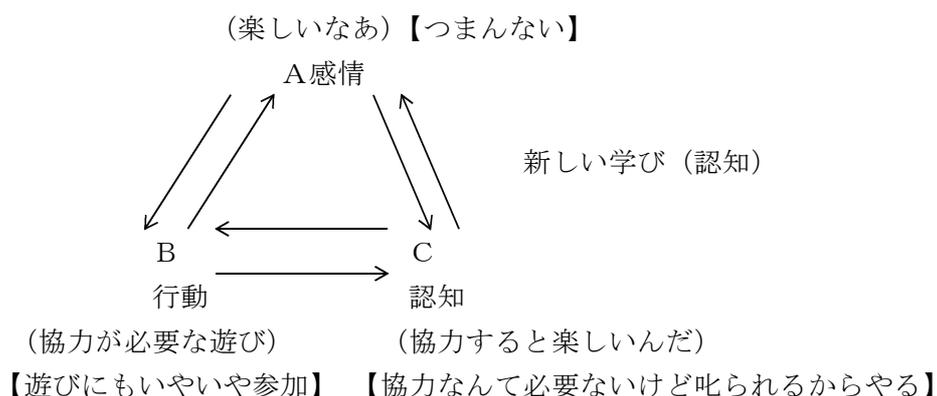
「大人と子どもが同じ価値観を共有できること」

があると思います。例えば「命は大切だ」「協力することは必要だ」「相手の立場になって行動する方がよい」「努力することはいいことだ」「感謝の気持ちを持つことは必要だ」などです。こんな大前提にNOという人たちにこれからの将来を任せられますか。私は嫌です。しかし、前述したように私が学校以外の場所で自然に学んだであろうこれらの共有すべき価値観が欠如しているとなれば、学校の教員がそれを何とか教えなければ生徒と同じ時代に生きる仲間にはなれないでしょう。だから

「時代にあわせて教育の手法が変化するのはあたりまえ」

そして我々教員はより効果的な方法を取り入れるべきなのです。私は変わらない自分がすばらしいと勝手に決め込んでいました。1度成功した手法を捨てたり変える勇気がなかったのです。紀元前の中国ですでに「君子は豹変す」とか「三日合わざれば刮目してみよ」といわれ、時や経験から人間は変わることの重要性を肯定しています。だからホントは私もわかっていたのです。「今のままでいいのかな」と。教育の手法を変えないことと教育の目標を変えないことのどちらが大切ですか？答えはあきらかだと思えます。

とはいえ、自分なりにうまく学級経営や部活動運営ができたことがありました。しかしその状況を冷静に分析してみると自分で自覚してはいませんでした。AFPYの理論や手法を行っていたことに気づいたのです。その理論とはA：Affect =感情、B：Behavior =行動、C：Cognition =認知で、それぞれがお互いに関連しあって学びが起きているという、教育理論です。



前向きな認知を得るには、正の感情（おもしろい、楽しい、安心）が必要であり、負の感情（怒り、恐怖、不安）のときには正しい認知はできないようになっているそうでこれを一言で言うと

「感情は脳をハイジャックする！」 だそうです

たとえば、運転中に突然、横道から車が出てきました。急ブレーキを踏んだ後、激しい感情（怒りや恐怖）を覚えるでしょう。そのとき理性的に考えて行動できますか？たぶん多くの場合クラクションを鳴らしたり怒鳴ったりして、それでも気分が落ち着かない状態が何分か続きますね。まさに脳は感情によってハイジャックされているのです。それがクールダウンしてはじめて「よほど急ぐことがあったのかな」とか理性的に考えることができるでしょう。ですから生徒の悪い行動に激しい感情をぶつけて指導した後、生徒にいくら理性的なことばをかけても教育的な効果（正しい認知をさせること）は期待できないということになります。（ま、悪い奴らを叱りとばすとこっちはスカッとするんですけどね）

感情に脳がハイジャックされても一瞬で理性的になれる瞬間

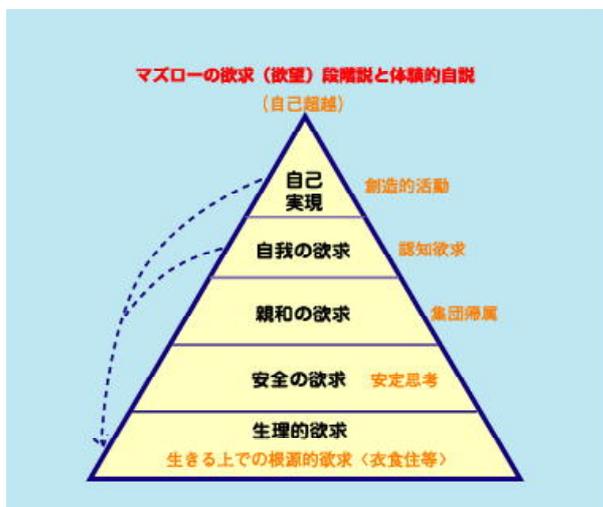
上の例で行くと横道から出てきた車が黒塗りのベンツで後ろにいかにもて感じのお兄さんが数人乗っているのを確認した瞬間です。これは怒りの感情よりもさらに上回る恐怖の認知がされているからです。「このまま怒っていたのではとんでもない目に遭わされるかも！」と冷静になってまっすぐ行かずに自分が横道に入ったりしてね。「腹をたてても仕方ないな」などと自分に言い訳したりするんですよ。

学校生活でこのことを考えてみると、生徒同士のケンカを一瞬で止めることのできる先生はその生徒にとって怒りの感情を超える認知（恐怖や尊敬や好意）をされているということです。今にして思うと昔の生徒指導ってみんなこのパターンだったんですね。いったん落ち着かせた後、話を聞いてあげて「君が怒るのもそれは無理がないな。先生でも腹が立つよ。悔しかったんだろうなあ。」というとは素直に反省したものでした。

しかし、今の生徒は先生に対して感情を超える認知をしているものが少ないので、大声出して止めると先生と生徒のケンカになりかねないのでしょうか。だから教師は冷静にケンカを止めないといけないのですね。（めんどくさい世のなかになったもんだ）

生徒は5段階の欲望のどこにいるのか？

マズローの欲望5段階説という理論があるそうです。



人間はこの段階をふまないと次の段階に進めないという理論です。

第一段階の生理的欲求は、昔から「衣食足りて礼節を知る」といわれるようにみなさん納得できるでしょう。

注目すべきは第2段階の安全・安心の欲求がかなわないと第3段階の親和の欲求（協力する・みんなと合わせようとする欲求）にならない。いくら先生が「みんな協力しようね」といっても

個人的な不安や心の障害があるときには、友達の手はにぎれない。だから集団

の中でその個人がどの段階にいるのか教師はみきわめてそれに応じたアドバイスを送らないとかえって逆効果になるということです。(私がよくやってしまう失敗です)

第4段階ではじめてリーダーになりたい。集団の中で認められる人になりたいという自我の欲求が芽生えます。ですから集団がバラバラの場合にはこの欲求は起こりません。

そしてある程度みんなに認められてはじめて、苦勞しても自分を高めたいという自己実現の欲求が起こるということです。プロはこういうふうに生まれるのですね。

こうした心理学の知識をもとにAFPYは計画されています。

そこでAFPYの主な特徴を考えてみると

1 フルバリュー・コントラクト

(すべての個人が集団の中で最大限尊重されるという安心感を与える)

楽しい・安心・真剣・公平がキーワード

その結果、多くの意見がでる。＝発表や活動が意欲的になる

2 チャレンジ・バイ・チョイス (自分に無理のない挑戦を選ぶ権利を与える)

その結果、不安感から解消され、集団で活動しようという意欲が生まれる。

3 ゴール設定と振り返り (目標を具体的にして・エラー・愉快・不愉快の理由や解決策を考えさせる。)

人はエラーを(失敗とってはいけないそうです)解決する過程で学ぶことが多い。

4 メタファーの使用 (いいたいことをあえて暗喩(メタファー)にして気づかせる)

人は何かの真理に自ら気づいたときに本当の学習になる。

これって、いい授業はだいたいそうなんじゃないの？

みなさんはAFPYのことをリクレーションと考えていませんか？確かにわたしがやっているアクティビティは、そのものですよね。

アクティビティは簡単に言うとお酒のない宴会のようなものです。宴会では少々無礼講が許されてけっこう仲良くなれたりしますね。宴会という場とアルコールという薬物によって脳の緊張がゆるみ、心の安心ゾーンが広がるのでしょうか。そして私がやっている役は(ファシリテーターというそうです)宴会にたとえれば幹事であるし、お酒でもあるわけで、進行が悪かったり酒の味が悪かったりするとムードが悪くなるわけです。

ただ、本当に仲良くなるのは宴会が終わった後、日常の会話がふえてからだと思います。AFPYが生徒に効果を期待するためには、アクティビティ以外の場で、いかにAFPYの雰囲気を持続させて学習活動に取り組むことが必要なのです。特別なことではありません。AFPYの手法はアクティビティに限らずあらゆる機会に使えるし、他の先生方も自分で使っていると思いませんか？

部活動はAFPYそのものだった！

私がかつて理想的な野球部を担当したことがあります。彼らは毎日ものすごい意欲で活動したし、実力をつけたし、仲間を大切にできたし、自分たちを負かしたチームを心から応援することができる奴らでした。残念ながら以後そんなチームをつくりだしていません。

彼らが1年の時、私ははじめて野球部の顧問になったので実力も何もわからず「俺は山口県で一番の監督になりたい。おまえらはどうか？」と尋ねました。「なりたいです」と答えたので「山口県で一番の練習をしたらそうなれるのではないか」ということになり、毎日終わるときに「今日の練習は県一だったか？」と聞くのが日課でした。これはAFPYの3です。ノックやトスをするときにはレベル123を決め、生徒に選ばせていました。これはAFPYの2です。その他、へんな練習や信じられないような選手の起用などほかの学校の先生から何でそんな練習や作戦で勝てるの？といわれましたがラッキーなことに目標を達成できました。(だから結果がすべてだと思ってました)

彼らは運動会はもちろんや合唱や演劇でも学校の中心となって活動してくれました。推薦で入れるのに他の生徒は受験で入るのだからと推薦をことわり、必死で勉強して希望の高校に入りました。そんな彼らが大好きでした。その後自分自身がある程度野球についてわかってくると無理だなと思う目標は設定しなくなっていました。練習や作戦もまともになりました。だんだんAFPYから遠い練習になっていました。そんなとき、あいつらとはものがちがうからなあと考えていましたが自らうまくいった手法をやめていたのですね。(大反省)

やればできると自分を信じることを *self fulfilling prophesy* (自己達成予言) というそうですが、この気持ちを持ってないことが学習意欲を大きく阻害していると思われます。どんなにがんばってもベスト8で先生からいわれたんじややる気はでんですよね。

研修でこのことに気づいたとき、何でもっと早く心理学を勉強しなかったのだろうと大後悔です。しかし、私の経験からも **AFPYは集団づくりに効果がある** のは間違いないと確信したのです。

もちろんAFPYは魔法ではありませんし、生徒によってはAFPYのアクティビティがかえって不安を広げてしまうこともあるようです。先生方にアクティビティを求めているわけではありません。ただ、今までの教育活動にAFPYの手法を意識的にプラスしていただきたいのです。これって学力向上にも特別支援にもつながると思いませんか？

研修後、それに関する本を買ったことなんか今まで1回もなかったのですが、今回すでに2冊購入いたしました。これだけでも私の意気込みがわかろうというものです。ただ、実際に行って経験しないとなかなか理解できないであろうことも十分承知しています。是非2月2日、2月7日の研修に参加していただきたいと思います。少なくとも学校にいるよりはおもしろいと思います。心理学者のエリスは「性格は変えられない。それでも生き方は変えることができる」といったそうです。その言葉を借りると

「性格は変えられない。それでも教え方は変えることができる」 by 藤田

ご精読ありがとうございました。